

## 1. 自分の畑

百五十年前、フランスのヴォルテールは『カンディード』という小説を書いて、人間世界の苦難を述べ、パングロス博士の楽天主義を嘲笑した。カンディードとその先生たるパングロス博士は多くの艱難辛苦を経て、最後にトルコの一隅に住みつき、畑を耕してたつきを立て、ようやくのことで安住の地を得たのであった。カンディードはパングロス博士の終始変わらぬ楽天主義について結論を下し、「いかにもおっしゃる通りです。何はともあれ、わたしたちの畑を耕さねばなりません」〔吉村正一郎訳・岩波文庫〕と言う。この格言はいまではすでに“人口に膾炙”されていて、意味するところは明白で、わたしが余計な脚注をつけるまでもない。しかしいまそれを書き写したのには少しく別の意味がある。いわゆる自分の畑とは、もともと非常に広い範囲を指し、別に何か一つに限られたわけではない。果物や野菜を植えてもよし、薬草を植えてもよし——バラやスマレを植えてもよい。ただその人個人の自覚に基づき、大小に関わらずそうと決めた地面を力量に応じて耕せば、それでいずれもその天職を尽くしたということになるのだ。この何の変哲もないありふれた談話の中で、特に明らかにしておきたいのは、バラやスマレを植えるのもわれわれ自身の畑を耕すということであり、果物野菜や薬草を植えるのと、種類に違いはあれ、同じ値打ちを持つということだけである。

われわれ自身の畑は文芸である。これはまず断っておかなければならない。わたしは決して他の活動を嫌って為すを屑しとしないのではない——ふだんからいろんな活動はすべて生活に必要なだとは思っている。しかし実は一つにはそのような才能がないことにより、大半はそういう趣味を欠いているために、その中で一つ身の振り方を決めざるを得ないのである。だがわたしはこの選択について決して後悔はしていないし、畑の小ささと乏しい収穫、しかも何の役にも立ちそうにない——を愧じてもない。自分の心の行くままに、バラやスマレを植える。これは個性を尊重する正当なやり方であり、たとい他人が言うように各人が果たしてほんとうに社会の恩に報いなければならぬとしても、わたしはすでに報いていると信じる。なぜなら社会は、果物野菜や薬草を必要としているだけではなく、同じように差し迫ってバラやスマレを必要としているのだから。——もしそれらを蔑視する社会なら、それは白痴の社会であり、形のみあって精神生活のない社会であり、われわれにはそれをかまう必要などない。もしも何か大義名分を掲げて、個性を犠牲にして白痴の社会に奉仕せよ——うわべを取り繕って社会心理に適合するという——と強制するならば、それはまったく、倫常の名を借りて忠君を強要し、国家の名を借りて戦争を強要するのと同じ不合理である。

お前の言うところでは、お前の主張する文芸は定めし人生派の芸術だろう、と言う人がある。一般に人生派の芸術ということばに、わたしはむろん何の反対もない。しかしふつうにいう人生派とは、「人生のための芸術」を主張するものである。これについてはわたしにはいささか意見がある。「芸術のための芸術」は芸術と人生を切り離し、そして人生を芸術の付属物とする。ワイルドの提唱した人生の芸術化のごとくに至ってはむろんあまり妥当とは言えない。「人生のための芸術」は芸術を人生の付属物とし、芸術を生活を改造するための道具としてやまない。これ

も芸術と人生を切り離すものでなくてなんであろうか。わたしは芸術は当然人生に関わるものであると思う。なぜならそれはもともとわれわれの感情生活の表現であるから。どうしてそれを人生と切り離すことができようか。「人生のため」——人生に実際の利益があるとは、当然のことやはり芸術が本来具えている一つの作用である。だが決して唯一の機能ではない。要するに芸術は独立したものであり、しかもまた本来人間に関わるものである。だからことさらにそれを人生と隔離する必要はないし、さらに人生に奉仕させることはない。ただそれが渾然たる人生の芸術になるに任せればよいのである。「芸術のため」派は個人を芸術のアルティザンとし、「人生のため」派は芸術を人生の召使いにする。いまでは個人を主体とし、感情思想を表現して芸術となり、それがそのままその生活の一部である。初めから他人の福利のために作るのではなく、他人がその芸術に触れて、一種の共鳴と感興を得て、その精神生活を充実させ豊かにさせる。それが又そのまま実生活の基本なのである。これが人生の芸術の要であり、独立した芸術美と無形の功利とである。わたしの言うバラやスマイレの栽培とはつまりかくのごときものである。ある人々は花を植えていささかの慰みとし、ある人々は花を植えて金を儲けようとする。が、ほんとうに花を植える者は花を植えることをその生活とする——そして花もまた美しくなかつたためしはないし、人間にとって無益であったためしはない。

※初出：1922年1月22日『晨报副刊』